

新建静岡通信

〒420-0946
静岡県静岡市葵区伊呂波町4-35
新建静岡支部事務局
TEL054-205-3222
FAX054-260-7088

東日本大震災復興支援ボランティア報告 津波被害の福島県いわき市薄磯地区から



震災後2ヶ月を経過しても荒涼たる景色が続く

日本共産党のボランティア募集に応えて、5月の3日から5日まで福島県いわき市へ支援に行ってきました。現地の様子と今後の支援のあり方をレポートします。(大塚功一)

二日の午後六時に仕度を整え被災地へと向かう。夜立ちが功を奏したのか、順調に進むことができた。常磐道に入ると地震の影響か路面の凹凸が車体を大きく揺らし被災地に向かっている事を実感させる。十二時に目的地に到着、前泊のボランティアは既に寝入っ

ている。音を立てない様に寝袋を開き就寝。
五月三日、任地はいわき市で大きな津波被害に遭った薄磯地区での瓦礫撤去作業となる。薄磯はいわき七浜に数えられる美しい海岸で知られる集落である。ここは津波で人口761人の内120人が死亡10人が行方不明という甚大な被害を受けている。津波被害は仙台、陸前高田や釜石などの被害が報道されるが福島も例外ではない。立入禁止の看板を横目にみながら集落の入り口を曲がり丘を越えるところの村があった。震災後二ヶ月が経つが道こそ確保されているものはいまだ瓦礫の山である。無惨な姿に息を呑むばかりである。
さて、作業は神社の参道廻りの瓦礫撤去となった。参道を塞ぐガードレールを取り外し瓦礫を搬出、積もった海砂を取り除いたところで昼食、午後は水路沿いの瓦



道の脇は流れ着いた瓦礫の上に道路上から取り除いた瓦礫が積み重なって、延々と続く

礫撤去。雑木の背丈程の高さに引つかかっている衣類や伝票の様な紙類など忌まわしい痕跡を取り除く。手作業でなければ出来ない作業である。瓦礫は大まかに可燃不燃に分けるが新たな瓦礫の山が築かれるだけである。撤去処分までには、時間が掛かりそうである。被災後の救援活動では重機で道路上の瓦礫を道端に除けながら探索と物資搬入が行われたため、道路脇には瓦礫が堆く積み上げられている。下敷きになっている瓦礫を引っ張っても

くれた。区長さんは津波で亡くなりこの方も家を失い避難所暮らしの身で区長の代行をなさっている。こんな事で喜んで頂けるとこちらが恐縮してしまう。
宿舎までの送迎のマイクロバスは途中かんぼの宿で下車して入浴させてくれた。かんぼの宿は旅館状態だが浴室は運転させて避難住民と震災ボランティアに無料で入浴サービスを提供しているのだ。こうした施設が稼働出来る状態で残ると威力を発揮すると感じた。宿舎となった長谷部あつし事務所は一斉地方選挙で県会議員選挙用に借りた建物があるまま震災支援センターに使われている。30余名を収容する施設としては、便所、洗面所などの数が厳しくなるのは当然で厨房も湯沸かし室程度のものしか設備されていない。それでも当地いわき双葉地区委員会は選挙戦以上の炊き出し体制で夕食を



やっと家が見えてきた。信じられないかもしれないが道路から家が見えないくらい瓦礫が山になっていた

賄ってくれた、結局、食事は三日間朝夕の食事を四人体制で作ってくれたので本当に大変だったろうと感謝に堪えない。

五月四日は個人住宅の家廻りの瓦礫撤去となる。政井さんのお宅は豊間小学校隣で山沿いの比較的高い土地であるが床上一メートルを超え、今日は前庭や裏の畑に打ち上げられた瓦礫の撤去作業をお手伝いする事になった。前庭にはやはり道路の瓦礫を除けたものが積み上げられていた。火打ち梁の掛かっ

た梁もあり、ある程度フレームを保っていた様で長い材や枠は重機で折った痕跡がある。人力で運べない程の大きさのもの



すっかり綺麗に片付いた政井さんの前庭、向こうに見える瓦礫の山に運んだ可燃不燃に分けてはみたが、元の山は混在瓦礫である。

のが無い事は助かる。家主は家の中の片づけが漸く終わったところ、ここからどうしたものか途方に暮れていたようだ。この日は総勢44人のボランティアが集い見る見るうちに片付いていった。畑も瓦礫を丁寧な拾い上げネギや大根の葉の間まで綺麗になった手作業の真骨頂である。もう一軒のお宅も駐車場部分に積まれた瓦礫撤去、建物裏側に流れ込んだ瓦礫は重機が入っていけない場所なのでこれも手作業ならはだった。瓦礫の山で釘を

踏み抜いた者が二名でた。

五月五日は昨日のお宅の片付けの続きを済ませた後、この集落の主力産業のかまぼこ工場の瓦礫片付け、二階事務所に上がる階段までのアップローチを確保する事が本日の作業の目的である。鉄骨二階建て外壁ALCの工場である。間口いっぱい海の面した開口部から津波が入りALCの壁をぶち抜



いていつている。二階へ上がる階段前のアルコーブは道路から取り除いた瓦礫が高く積み上がった。この辺りは非木造の工場建築群が建っていたので積み重なる瓦礫が昨日までのものとは違った。やれALC版であったり折り半であったりコンクリート架台片であったりと重い長いそれらが絡んでいるなど、人力片づけでは困難な条件が揃っ

た。前日の片づけで見つけた30mmの漁網用のロープを拾ってきて、ALCや鉄骨に結びみんなで引きずり出しながらの片づけとなった。片づけが進むにつれ錆びで劣化した階段の柱脚部が津波で折られているのが露わになり副区長さんのがっかりする顔が浮かんだ。スペースが出来たから仮設階段をかけてくださいねと胸の中に呟く。

**持続可能なボランティア活
動のために**

被災地のボランティア需要はまだまだ続く事だろう。出かけて初めて気づく事もあり、経験の蓄積という意味で気づいた事を記しておきたい。先ず被災地に赴く際、高速道路料金免除となる災害派遣等従事車両証明書を行政

庁が発行する制度がある事である。申請から三日程度時間が掛かるのだが、間に合わなくても特例措置があるので、目的地の料金所で災害派遣等従事車両である旨を係員に述べ、車種、運転者、乗務員名などを記したメモを渡し後日証明書のコピーを送ってもよい。こうした制度がある事を派遣元や派遣先機関が熟知している事が必要である。助けを待つ人がいるのに移動と食住が自己完結型でないと助けに行けないのでは分厚い支援体制は組めないと思うのだ。

受け入れ施設関連では、専用の宿泊施設出はないため衛生設備の数が不足し清潔に保ちにくい。建築計画的には一つの便器で八人のキャパとするので直ぐ汚れる。今回の様に期間が決まっている場合ボランティア互選で管理者を専任して使用上の注意と掃除用具の調達などしては如何なものだろう。



食事も今回はいわき双葉地区委員会の献身的奮闘で大変有難かった事柄である。食事は自前と事前に伝えられていたのでボランティア側の財政的負担を大きく軽減した。食事付となればもっと参加者が増えたかも知れない。しかし震災後粉骨砕身の奮闘をしてきた地元の皆さんの負担は大変なものだったと察する。ここでもボランティアは到着後直ちに運営委員会を発足させ自炊当番体制を組めば地元の皆さんの負担軽減が図れる。食と住を用意して頂けるのだから後は自分たちで炊けるだろう。

奉仕先と作業用の小道具について、今回のボランティアで人海戦術型作業は個人住宅への支援で有効に發揮されると感じた。現地機関は奉仕先を決める時の優先位の目安とされたい。その上で作業内容に適した小道具を用意する。今回はスコップの携行を指示されたが瓦礫を小運搬する箕やネコ車が必要だった。現場に散乱していたコンテナを代用して使ったが能率を欠いた。屋内の泥掻きならほうき、ゴムべら、吸水用大判スポンジなど、重量物の取り除きはレバーブルックやチルホールといった作業に応じた道具を揃えるコーディネーターが必要である。地元の建設の仲間がその役割を担ってくれる筈である。



ドアの消防団の金文字を見るまでなんだか判らなかつた二輪の乗り物。荷台はちぎれて100m位離れた場所にあった。津波に飲み込まれると紙くずを手で丸めた様に破壊される。生身の人間ならどうなるのか想像するのも無惨だ。

夏には多くの海水浴客で賑わう薄磯海岸。河口付近の防波堤が津波で破壊されている。地元報道によると13日に薄磯地区で120名の死亡が確認されている。震災後2日目でこれ程多くの方の死亡が確認されたという事は遺体が瓦礫の中にいた事を示さない。おそらく引き波で運ばれこの海に浮いたのだ120人の遺体が。



右の写真は今回の被災地で最も印象的な光景である。近接してるから分かり難いがまわりは全て流されて、この一軒だけが津波に耐えてぼつんと残っている。積水ハウスか？一階は津波が通過してめっちゃめちゃだが躯体は歪むことなくしつかり2階を支えている。内外装を直せば十分に使えるのだが解体承諾の紙が貼られていた。もうこの土地に住みたくなかないとの意思表示なのか、コミュニティは再生されるのだろうか。

あとがき



人海戦術の瓦礫撤去は遅々として進まず静岡から勇んで駆けつけたが非力を感じるものだった。二日目の民家の片付けが終了後家主さんがお礼の挨拶をされた。復興して街が綺麗になったら皆さん是非遊びに来て下さいと仰った。必ず復興させる。又ここに住むんだという静かな決意が伝わり胸を衝いた。このお宅の近くに比較的新しい木造住宅が原型を留めていたが解体承諾の張り紙がされていた住む事を放棄してしまったのか。又ここに住みたいと思う人が何人いるんだろう。町の大半を失って安全なところって何処にあるんだろう。(大塚)

